

レファレンス事例集 地域編

注：長浜市内の図書館での調査結果をもとに編集しています。「参考資料」として掲載した資料はすべて図書館に所蔵しています。事後調査により加筆修正する可能性があります。ご了承ください。

- Q1 高月町にあったという阿曾津千軒の場所・伝説について
- Q2 太平洋戦争中、湖北地方に空襲があったかについて
- Q3 海北綱親（海北友松）について
- Q4 浅井長政の母について
- Q5 五村別院と教如上人について
- Q6 淵元太郎右衛門について
- Q7 明治期の長浜-関ヶ原間または龍が鼻間の鉄道事情について
- Q8 浅井氏の居城であった小谷城について
- Q9 小室藩の改易後から明治に至る領地について
- Q10 さばそうめんについて
- Q11 土倉鉱山（木之本町金居原）について
- Q12 賤ヶ岳戦跡碑について
- Q13 深坂峠（塩津街道）の紫式部の歌碑について
- Q14 野瀬藤五郎の伝説について
- NEW Q15 湖北地域（特に木之本町古橋周辺）の茶製造について 2024/9掲載
- NEW Q16 藤岡和泉について 2024/9掲載
- NEW Q17 塩津街道・海道のルートについて 2024/9掲載

NEW	Q18 長浜の引札について	2024/9掲載
NEW	Q19 大吉寺（旧浅井町野瀬）の歴史について	2024/9掲載
NEW	Q20 国友鉄砲と曳山の関わりについて	2024/9掲載
NEW	Q21 昭和56年（1981）の余呉地方の豪雪について	2024/9掲載
NEW	Q22 長浜市の劇場について	2024/9掲載

登録番号	Q1	調査年月	2011年5月
質問	<p style="text-align: center;">アツセケン</p> <p>高月町にあったという阿曾津千軒の場所・伝説について</p>		
回答	<p>『滋賀県百科事典』p.12「あそつばばあ：阿曾津婆」に、「高月町に伝わる伝説で高利貸しの老婆の話。金を借りた人が返せなくなり老婆を簀巻きにして琵琶湖に放り込んだ。...老婆の恨みで千軒あった村が津波で琵琶湖に引きずりこまれ、村人が逃げたところが七野あり七里村というと伝えている」とありますが、場所は特定できません。p.421「水没村伝説」に「琵琶湖周辺の山々では、地震などでもとあった村が水没したという伝説がある。高月町片山の阿曾津千軒にもあり...。」との記述があります。</p> <p>『高月町のむかし話』p.20に「西野山を越えて、琵琶湖へ出たところに「阿曾津」という所があります...」との記述が、また『奥びわこ物語』p.34には「阿曾津をとり囲む西野山の木々も...」との記述があります。『高月町史 分冊1』p.144に地図の掲載があり、高月町西野の北西あたりが阿曾津だとわかります。そのほか『西野水道と農民』p.11に地図が掲載されており、阿曾津千軒伝説について記載があります。『昔話-研究と資料 41号』p.70に「滋賀県湖北の千軒伝承 阿曾津婆の伝説を中心として（黄地百合子著）」論文が掲載されています。</p> <p>参考資料：市内図書館で所蔵しています</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 『滋賀県百科事典』 滋賀県百科事典刊行会/編 大和書房 ■ 『高月町のむかし話』 高月町教育委員会/編 ■ 『奥びわこ物語』 三田村正子/作 文芸社 ■ 『高月町史 分冊1 景観・文化財編』 高月町/編 ■ 『西野水道と農民』 成田迪夫/著 サンライズ出版 ■ 『昔話-研究と資料 41号』 日本昔話学会 		

登録番号	Q2	調査年月	2015年4月
質問	太平洋戦争中、湖北地方に空襲はあったのか		
回答	<p>『長浜市史 第4巻』p.258に昭和20年7月28日、長浜に空襲があったという記載があります。『湖国に模擬原爆が落ちた日』によると、滋賀県が発表している県内の空襲は19件。うち湖北地方は上記の1件のみでした。(p.17-22)ただし、被害がなかったものや機銃掃射などは含まれていません。『余呉町誌』には「町内には空襲による被害がなかった」とあります。『米原町史』には機銃掃射の記載があります。『山東町史』には「空襲による被害はなかった」と記載があります。『近江伊香郡誌(下巻)』は昭和28年発行ですが、太平洋戦争の記述はありません。『滋賀県の歴史』p.328に「滋賀県では彦根と大津が空襲を受け大きな被害がでている」旨の記載があります。年表p.327に「長浜市の鐘紡長浜工場に小型爆弾が数個投下され、死者一人を出す」と記載されています。『点字で読む滋賀で学ぶ戦争の記録(もっと知りたい滋賀で学ぶ戦争の記録)』には「軍事施設が狙われたこと」の記載があります。</p> <p>参考資料：市内図書館で所蔵しています</p> <p>『長浜市史 第4巻』長浜市史編さん委員会／編</p> <p>『湖国に模擬原爆が落ちた日』水谷孝信／著 サンライズ出版</p> <p>『余呉町誌』余呉町誌編さん委員会／編</p> <p>『米原町史』米原町史編さん委員会／編</p> <p>『滋賀県の歴史』山川出版社／編</p> <p>『点字で読む滋賀で学ぶ戦争の記録(もっと知りたい滋賀で学ぶ戦争の記録)』滋賀県平和記念館学習用小冊子編集委員会／編 滋賀県平和祈念館(注：墨字版・点字版のセット)</p>		

登録番号	Q3	調査年月	2018年11月
質問	かいほり つたね かいほり こつね 海北 綱親 …… 海北友松の父…について		
回答	<p>『戦国大名家臣辞典西国編』p.86に「善右衛門と称す。赤尾・雨森とこの海北を合わせ、浅井氏の海赤雨三将(かたけりかつね)とよんでいる。特に海北綱親は浅井氏の武者奉行を務めたとい所伝もあり…秀吉が綱親と直接戦ったことがあり、「海北綱親はわが軍法の師」といった話は有名」との記載があります。</p> <p>『郷土の先哲』p.70～84では、子どもにもわかるように簡単に海北家の起こりから没役まで説明しています。</p> <p>その他…『海北友松とその族』には「三・海北善右衛門」の項のほか「海北家由来諸記」の記載があります。『近江東浅井郡の昔話』の「海北友松」p.14ではごく簡単ですが綱親の人物像の記載があります。</p>		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■ 『戦国大名家臣辞典西国編』 山本大/編 新人物往来社		
	■ 『郷土の先哲』 浅井町教育委員会/編		
	■ 『海北友松とその族；海北顕英遺稿集』 石田肇/編		
	■ 『近江東浅井郡の昔話；東浅井郡の昔話』 馬場秋星/著 イメージアシバタ		

登録番号	Q4	調査年月	2010年4月
質問	浅井長政の母について（特に浅井家の家系図、婚姻事情について）		
回答	<p>『みーな びわ湖から vol.97』の特集「浅井家をめぐる女性たち」に詳しく記載があります。高時川の左岸を管理する湖北町丁野の浅井家と右岸を管理する井口家の緊張関係を緩和する意図があったことなどが記されています。</p> <p>『浅井長政と姉川合戦』p.40-41に系図があります。また同p.46-47に、「高時川右岸を灌漑する伊香郡用水を統括していた【井預かり】である井口氏と、高時川左岸を灌漑する浅井郡用水の代表者である浅井氏は、絶えず緊張関係にあった」、「両家の婚姻は、浅井氏の最大の経済基盤であった小谷城下の生産を安定させる目的があった」とあります。</p> <p>『みーな びわ湖から vol.126』p.15に「高時川右岸を灌漑する堰を所有していたのは、伊香郡の実力者である井口弾正であった」、「浅井郡を地盤とする浅井氏は、井口弾正の娘[井口阿古（イカアノ）]を長政の父である久政の正室として娶ることによって井口家を重用する代わりに、上流に用水を引かせるという取引をおこなったと思われる」との記載があります。</p> <p>参考資料：市内図書館で所蔵しています</p> <p>■『みーな びわ湖からvol.97』長浜みーな協会 参考文献として『近江伊香郡志』、『近江源氏』田中政三著、『ふるさと井口の歴史探訪』高橋正泉著、『高月町の昔話』高月町教育委員会があげられています。</p> <p>■『みーな びわ湖からvol.126』長浜みーな協会</p> <p>■『浅井長政と姉川合戦』太田浩司/著 サンライズ出版</p>		

登録番号	Q5	調査年月	2013年1月
質問	五村別院と教如上人について		
回答	『長浜御坊三百年誌 付 五村御坊』p.22「五村懸所」に教如上人と五村の関係について記載があります。その他下記資料を参考にしました。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『長浜御坊三百年誌』中沢南水/著 永田文昌堂		
	■『教如上人』上場顕雄/著 真宗大谷派宗務所出版部		
	■『とらひめのれきし』虎姫町立図書館サービス充実支援事業実行委員会/編		
■『五村御坊由緒記』			

登録番号	Q6	調査年月	2011年12月
質問	ｽｲﾄ 如ｸｲﾏ 湊元太郎右衛門について		
回答	『長浜市史 第3巻』 p.352に「表43：大通寺に係する大工など一覧」として 大通寺建造に関わった屋根屋として名前のみ記載があります。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『長浜市史 第3巻』長浜市史編さん委員会/編		

登録番号	Q7	調査年月	2021年2月
質問	明治期の長浜－関ヶ原間または龍が鼻間（明治16年開通）の鉄道事情について		
回答	<p>『長浜市史 第4巻』p.91、p.103には「旧長浜駅から関ヶ原間（明治16年～明治32）」の記載があります。『蒸気機関車200年史』p.216～には図の掲載があります。『日本の鉄道車輛史』p.31には「国産のSLは860形式で1893（明26）」とあり、明治16年に開通していたなら国産の車輛ではなかったことがわかります。</p> <p>参考資料：市内図書館で所蔵しています</p> <ul style="list-style-type: none"> ■『長浜市史 第4巻』長浜市史編さん委員会/編 ■『蒸気機関車200年史』斎藤晃/著 NTT出版 ■『日本の鉄道車輛史』久保田博/著 グランプリ出版 ■『写真集・長浜百年』長浜市総務部企画課/編 		

登録番号	Q8	調査年月	2012年2月
質問	小谷城の築城について		
回答	<p>小谷城は長浜市湖北町伊部の小谷山にありました。小谷城の築城は不詳な部分もありますが、1525年（大永5年）、六角定頼（〇かかガ 刊）が湖北に侵攻した際に、小谷城の大嶽を攻めたことが『長享年後畿内兵乱記』に記載されています。『ふるさと読本 浅井氏三代と小谷城』、『小谷城絵図の基礎的考察-小谷城下の復元的研究2-』には「1524年（大永4年）頃、浅井亮政が小谷山の最頂部に大嶽を築城した」との記述があります。そのほか多数出版されていますが、築城に関する資料を集めました。</p>		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■滋賀県百科事典 滋賀県百科事典刊行会/編 大和書房		
	■史跡小谷城跡 浅井氏三代の城郭と城下町 湖北町教育委員会/編集 湖北町教育委員会		
	■浅井三代小谷城物語 馬場秋星/著 木精舎		
	■湖北残照 歴史篇 戦国武将と浅井三姉妹 豊島昭彦/著 サンライズ出版		
	■戦国大名浅井氏と北近江 浅井三代から三姉妹へ 長浜市長浜城歴史博物館/編		
	■ふるさと読本 浅井氏三代と小谷城 湖北町立小谷小学校/制作 歴史・文化ボランティア（亀花クラブ）/編		
	■戦国大名浅井氏と小谷城 小和田哲男/編著 湖北町教育委員会		
	■戦国大名浅井氏と小谷城 中村一郎/著 小谷城址保勝会/編		
	■近江の山城ベスト50を歩く 中井均/編 サンライズ出版		
	■図解近畿の城郭 II・IV 中井均/監修 城郭談話会/編 戎光祥出版		
	■小谷城絵図の基礎的考察-小谷城下の復元的研究2- 北村圭弘 『滋賀県立安土城考古博物館紀要 第9号』 抜刷		
	■滋賀県中世城郭分布調査 7 伊香郡・東浅井郡の城 滋賀県教育委員会/編 滋賀県教育委員会		
	■史跡小谷城跡清水谷地区試掘調査報告書 湖北町教育委員会・滋賀県文化財保護協会/編集 湖北町教育委員会		
■史跡小谷城跡環境整備事業報告書 湖北町教育委員会/編 滋賀県文化財保護協会			

登録番号	Q9	調査年月	2023年6月
質問	小室藩の領地（改易後から明治に至るまで）について		
回答	<p>『辻宗範とその周辺 — 辻宗範と小室藩』p.83に「天明八—七八八 五月六日、政方の時改易となり領地は没収され廃藩 彦根藩預かりとなる（略）寛政一—七八九 九月十七日、城館、家臣の住宅、木石に至る迄一切競売にされた。寛政三 —七九一 江戸奉行勝与忠昌来り、開墾して畑とせよとの命あり…」とあります。</p> <p>また『東浅井郡志 卷三卷』p.162-163にも「（六）巡見使の通過 七月九日、江戸より内命あり。日く江北の収公地は、之を大津代官所に支配せしむべしと。…（八）第館の競売 寛政元年六月。大津代官所より、遍く小堀家の第館を首とし、家臣の住宅より庭園の木石に至るまで、悉く皆之を競売に付し、…」とあります。</p> <p>『近世藩制藩校大事典』p.634には「…領地没収の上大久保忠顕に永預けとなり、廃藩された」とあり、改易後は廃藩となり、彦根藩もしくは大津代官所か大久保忠顕という人物が所有していたようですが、確定には至りませんでした。ただし、どの資料からも改易後一年程度で城館等は全て競売に出され、領地は全て畑となったことがわかります。</p> <p>藩主であった小堀家自体は『日本史諸家系図人名辞典』p.306に「…天明8年（1788）政方の代に、伏見奉行在任中の失政により改易となった。政一の弟正春家の後裔が、文政11年（1828）小堀家の再興をゆるされ、300俵の扶持をうけて存続した」とあり、改易後のおよそ40年後に再興されたようです。</p>		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『辻宗範とその周辺 — 辻宗範と小室藩』宮田良英/著		
	■『東浅井郡志 第三卷』日本史料刊行会		
	■『近世藩制藩校大事典』大石学/編 吉川弘文館		
	■『日本史諸家系図人名辞典』小和田哲男/監修 講談社		

登録番号	Q10	調査年月	2011年7月
質問	さばそうめんについて		
回答	<p>さばそうめんがどんな料理であるかは『長浜みーなvol.44』p.8-9が詳しく、「太い竹ぐしを刺して丸ごと焼いた”焼きサバ”とそうめんを、砂糖と醤油で味付けした濃い目の煮汁で甘辛く炊き合わせたもの。三月から五月にかけて、とくに長浜曳山まつりやゴールデンウィークの頃に、よく作られる湖北の家庭料理」と紹介されています。また、作られる時期については、春の農繁期に嫁の実家から嫁ぎ先に品物を持っていく「五月見舞い」といわれる湖北独特の習慣があげられています。</p> <p>『ごめんやすおいでやす 第2集』p.43には、「かつては、若狭で陸揚げしたさばを、浜ですぐに焼いて鯖街道から湖北地方に運ばれました」といった記述とともに、簡単な味付けの仕方が記載されています。</p> <p>『つくってみよう滋賀の味 新装合本』p.69と『こぐれひでこの発見! 郷土食』p.91には、調味料の分量まで明記されたレシピが掲載されています。</p> <p>また、『日本の食生活全集25 聞き書 滋賀の食事』p.295と『おもしろふしぎ日本の伝統食材 7さば』p.26には、朽木地方の郷土料理としても紹介されています。</p>		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『長浜みーなvol.44』長浜みーな協会		
	■『ごめんやすおいでやす 第2集』会議BIWA/編 びわ町		
	■『つくってみよう滋賀の味 新装合本』滋賀の食事文化研究会/編 サンライズ出版		
	■『こぐれひでこの発見! 郷土食』こぐれひでこ/著 日本放送出版協会		
	■『日本の食生活全集25 聞き書 滋賀の食事』農山漁村文化協会		
	■『おもしろふしぎ日本の伝統食材 7さば』おくむらあやお/作 中川学/絵 萩原一/写真 農山漁村文化協会		

登録番号	Q11	調査年月	2022年6月
質問	土倉鉱山（木之本町金居原）について		
回答	<p>『ふるさと伊香』 p.109によると、1907年（明治40年）に岐阜県の中島善十郎氏が奥土倉で鉱石を発見し、鉱山の開発に乗り出しました。1910年（明治43年）には田中鉱業株式会社が鉱山を買収し採掘に着手。その後、昭和9年に日室鉱業開発株式会社が買収しました。『改訂ふるさと伊香』 p.130によると、最盛期は昭和33年頃で、月に98 tもの銅が産出していました。</p> <p>『金居原 PHOTO BOOK』 p.29によると、「鉱山従事者とその家族はもっとも多いときで1000人にもなったといいます。出口土倉付近には、ブロック住宅と呼ばれた住居、分校、保育所、マーケット、共同風呂、理髪店に映画館、うどん屋などもでき、鉱山町として発展していった」と記載があります。</p> <p>『湖国と文化 56号』 p.16-21にも、当時の人々の生活や催物、雪害などについて、白黒写真とともに詳細に紹介されています。</p> <p>『長浜みーな vol.123』 p.44によると、「昭和38年の銅鉱石の貿易自由化をきっかけに、銅価格の低迷と採算性の悪化をもたらし、さらに西部鉱床の低品質、ほかの鉱脈の老化などによって同40年（1965）8月には閉山を余儀なくされた」と記載があります。</p> <p>『湖北の今昔』 p.55には昭和初期と昭和33年の鉱山と閉山後の鉱山跡が白黒写真で紹介されています。『ぐるっと探検産業遺産』 p.98-101にも遺構のカラー写真が掲載されています。</p>		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■ 『ふるさと伊香』 ふるさと伊香編集委員会/編		
	■ 『改訂ふるさと伊香』 滋賀県伊香郡教育委員会/編		
	■ 『金居原PHOTO BOOK』 長浜ローカルフォト/制作・発行		
	■ 『湖国と文化』 56号 滋賀県文化体育振興事業団		
	■ 『長浜みーなvol.123』 長浜みーな協会		
	■ 『湖北の今昔』 吉田一郎/監修 郷土出版社		
	■ 『ぐるっと探検産業遺産』 前畑温子/著 神戸新聞総合出版センター		

登録番号	Q12	調査年月	2019年9月
質問	賤ヶ岳戦跡碑について		
回答	<p>『近江歴史散歩』 p.145によると、「賤ヶ岳頂上の戦跡の碑は明治十一年の建立で、県令籠手田安定撰の漢文が刻まれている。合戦の由来を述べ、飯浦、大音、川並の村民の手で建てたものであると明記してある」と記載があります。</p> <p>『余呉の庄と賤ヶ岳の合戦』 p.229-232には碑文の原文と意訳が全文掲載されています。</p> <p>『史料県令籠手田安定1』 p.192には原文のみが全文掲載されています。</p> <p>『賤ヶ岳合戦史跡めぐり』 p.2-3には碑文の一部ですが、原文と現代語訳が紹介されています。</p> <p>『滋賀県の歴史散歩 下 新版』 p.144によると、碑文は賤ヶ岳山頂広場の一角に立っており、碑の白黒写真が掲載されています。</p> <p>『余呉の庄と賤ヶ岳の合戦』 p.229にも白黒写真が掲載されています。</p> <p>『賤ヶ岳 歴史に刻まれた合戦の地』にはカラー写真が掲載されています。</p>		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『近江歴史散歩』 徳永真一郎/著 創元社		
	■『余呉の庄と賤ヶ岳の合戦』 余呉町教育委員会		
	■『史料県令籠手田安定1』 鉅鹿敏子/編・発行		
	■『滋賀県の歴史散歩 下 新版』 滋賀県高等学校歴史散歩研究会/編 山川出版		
	■『賤ヶ岳合戦史跡めぐり』		
	■『賤ヶ岳 歴史に刻まれた合戦の地』 長浜観光協会		

登録番号	Q13	調査年月	2017年11月
質問	深坂峠（塩津街道）の紫式部の歌碑について		
回答	<p>『人物で読む源氏物語 第十巻 朧月夜・源典侍』p.269によれば、「…塩津山は琵琶湖北岸より、現在の西浅井沓掛から福井県敦賀市足田を結ぶ深坂古道と呼ばれる古道のある山のこと。古道に入って一時間ほどのところに紫式部の歌碑がある」とあり、紫式部歌碑の写真が掲載されています。しかしながら内容については記されていません。</p> <p>『源氏物語の近江を歩く』p.53-p.55には「国道8号沿いの紫式部公園にたつ式部の歌碑。常夜灯に隣接する」と写真と共に掲載されています。歌については深坂峠の案内板と同じものが記載されています。</p> <p>歌とその意味については、『長浜みーなvol.142』p.30-p.33に、「紫式部も通った道 長徳2年（996）、紫式部は父の藤原為時が越前の国司として任に就く際に、ともに深坂古道を超えた。彼女は生年不詳だが、20歳前後の頃だという。輿を担ぐ人夫が、深坂超えの道をたいへん険しい道だと言っているのを聞いて、次の歌を詠んだ。</p> <p>知るぬらむ 行き来にならず 塩津山 世に経る道は からきものぞと あなたたちが通いなれたこの道もつらいけど、世の中の道はもっと厳しいものですよ。そういう意味のようだが、やはり育ちの良い女性の歌だ」と書かれています。</p> <p>また、『近江漫遊 歴史街道を遊ぶ』p.19、『紫式部と歩く近江・越前歌の旅』p.51、『紫式部日記 紫式部集』p.123にも歌やその意味についての記載があります。</p> <p>長浜市ホームページ（2019年2月19日公開）「長浜の自然と歴史に親しむハイキングコース」のページに、深坂古道コースマップがあり、そこに紫式部歌碑の場所と歌の内容が記載されています。</p> <p>参考資料：市内図書館で所蔵しています</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 『人物で読む源氏物語 第十巻 朧月夜・源典侍』上原作和/編 勉誠出版 ■ 『源氏物語の近江を歩く』畑裕子/著 サンライズ出版 ■ 『長浜みーなvol142』長浜みーな編集室 ■ 『近江漫遊 歴史街道を遊ぶ』菊池光治/著 サンライズ出版 ■ 『紫式部と歩く近江・越前歌の旅』中嶋守治/著 ■ 『紫式部日記 紫式部集』山本利達/校注 新潮社 <p>関連サイト：https://www.city.nagahama.lg.jp/0000005439.html（閲覧日2023/7/16）</p>		

登録番号	Q14	調査年月	2011年5月
質問	野瀬藤五郎の伝説について		
回答	<p>『滋賀県湖北昔話集』には昭和58年に聞き取り調査を実施した内容がまとめられており、p.151に「とうごろうの石こづめ」が紹介されています。</p> <p>『東浅井郡志 第三巻』p.113に「野瀬藤五郎に関する伝説」が記載されています。</p> <p>『近江東浅井郡の昔話』p.40には「野瀬藤五郎の石子詰」という話が記載されています。この伝説は元禄12年小室藩の時代の事件で、小室藩主が百姓の藤五郎を処刑した話です。「…事件の真相はどのようであったのか。どうやら、闇から闇へ葬り去られたらしく、記録も少い。無論、民間の伝承としてあまねく湖北地方で言い伝えられているので、一応誰でも知っている話である。しかしよく調べてみると、疑問や不明の点が少くない」とあります。</p> <p>野瀬藤五郎および野瀬一族については『野瀬藤五郎墓所考』、『野瀬藤五郎系譜資料集成』が詳細に記述しており、『野瀬藤五郎墓所考』p.1には「野瀬藤五郎」という名は当主に受け継がれているらしく、刑死した当主は第十代野瀬藤五郎第七世だと記されています。p.29の系譜には元禄14年刑死となっています。また『近江國浅井郡野瀬村の歴史と傳承』p.45には藤五郎井といわれる水路をつくった伝説が紹介されています。</p>		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『滋賀県湖北昔話集』國学院大学説話研究会/編		
	■『東浅井郡志 第三巻』日本資料刊行会		
	■『近江東浅井郡の昔話』馬場秋星/著 イメーディアシバタ		
	■『野瀬藤五郎墓所考』中西義治/編著 江北文書研究会		
	■『野瀬藤五郎系譜資料集成』中西義治/編著 江北文書研究会		
	■『近江國浅井郡野瀬村の歴史と傳承』小林善次郎/編		

登録番号	Q15	調査年月	2018年11月
質問	湖北地域（特に木之本町古橋周辺）の茶製造について		
回答	<p>『滋賀縣史 第4巻』（昭和3年発行）p.204には明治20年県内に坂田郡外三郡茶業組合（坂田・東浅井・伊香・犬上）などの4つの組合を設立したとあります。</p> <p>『きのもと七選』 p.88によると「古橋のお茶は、千年以上の昔、鶏足寺を再興した僧最澄が統治に植えたのが始まりと言われ…」とあります。</p> <p>『滋賀県市町村沿革史 第4巻』 p.619-p.620にも「茶は千有余年の伝統を有するといわれながら…」とあり、昭和26年（1951）ごろに高時村【補足：古橋は同書 p.594によると、古橋村から明治22年（1889）に5か村合併により高時村になり、さらに昭和29年（1954）には更なる合併によって木之本町と名称を変更している】で品種改良、昭和27年（1952）製茶工場の設立がされたとあります。</p> <p>古橋に限らず、『滋賀県物産誌 巻11；伊香郡』には郡内でも広く茶園を有していたという記録があり、『滋賀県の茶業』（p.7「茶産地分布図」）によると昭和63年頃の木之本付近には茶園があることがうかがえます。（※詳細な地名はなくおよそその位置程度がわかります）</p> <p>『近江伊香郡志 中巻』 p.404-p.405にも茶についての項目がありますが、こちらもしっかりとした茶業の始まりは不明です。</p> <p>また滋賀県立図書館所蔵、大正7年発行の『滋賀縣之茶業』 p.1-p.2によると、大正7年時点で滋賀県内では、ほとんどの場所で副業として茶の製造を行っていたようです。なお同書の「第二章沿革 其一 史績」 p.14-p.15に「伊香郡木之本附近ノ古橋茶…更に精査スル處アルベシ」と古橋茶として確認されていますが詳細は不明です。</p> <p>参考資料：市内図書館で所蔵しています</p> <ul style="list-style-type: none"> ■『滋賀縣史 第4巻』滋賀県庁/編 弘文堂書店 ■『きのもと七選』きのもと倶楽部/編 滋賀県伊香郡木之本町企画課 ■『滋賀県市町村沿革史 第4巻』滋賀県市町村沿革史編さん委員会 ■『滋賀県物産誌 巻11；伊香郡』（上）・（下） ■『滋賀の茶業』関西茶業振興大会実行委員会 ■『近江伊香郡志 中巻』富田八右衛門/編纂 江北図書館 <p>*滋賀県立図書館所蔵：『滋賀縣之茶業』滋賀県内務部</p>		

登録番号	Q16	調査年月	2010年7月
質問	藤岡和泉について		
回答	<p>『近江國坂田郡志第3巻下』p.515には、初代藤岡和泉甚兵衛について「長浜市伊部町の人なり、其の先は三田村より出づ。和泉元和三年八月一日を以て生る」、「彫刻を井関氏に学び…某年浅井郡山田村和泉神社社殿に妙技を奮ひ…依て和泉甚兵衛の称を得」との記載があります。また、『長浜市史 第3巻』p.319-p.321、『み～な びわ湖からvol.127』p.44にも記載があります。主に神社仏閣建築に携わる宮大工でしたが、『改訂近江國坂田郡志第3巻下』p.515に「既にして佛壇の製造を創め…浜壇の名遠近に高し」とあるように仏壇製作も行っていたようです。藤岡和泉が作った仏壇を「和泉壇」と呼びます。「和泉壇」については、『長浜市史 第3巻』p.321-p.322『近江を築いた人びと下』p.225-p.226に記載があります。</p> <p>『山車（YAMA）・屋台（ヤマ）・曳山（やま）』p.97に「長浜の曳山建造者は…長刀山を含む十三基の曳山の内、実に九基について本体か亭部分が、藤岡家によることが知られている」とあるように長浜曳山祭の曳山を藤岡一門が建造したこともわかっています。</p> <p>初代藤岡和泉甚兵衛以降の藤岡一門については、『研究紀要 第5号「近江大工・藤岡和泉の名乗りについて」』p.2-p.3の「歴代の藤岡和泉についてのこれまでの研究」、p.9「江戸時代の藤岡和泉の歴代当主とその建造物」で初代から八代目光隆までについて記述があります。</p> <p>『藤岡和泉一企画展 ユネスコ無形文化遺産・長浜曳山祭を造った大工のすべて』p.5に藤岡一門が手がけた作品を知る事ができる資料「藤岡家大工資料」について記述があり、同書内でその一部がカラー写真で紹介されています。</p> <p>参考資料：市内図書館で所蔵しています</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 『近江國坂田郡志第3巻下』滋賀県坂田郡教育会/編 西濃印刷(株)出版部 ■ 『長浜市史 第3巻』長浜市史編さん委員会/編 長浜市役所 ■ 『み～な びわ湖からVol.127』長浜み～な協会 ■ 『山車（YAMA）・屋台（ヤマ）・曳山（やま）』市立長浜城歴史博物館/編 市立長浜城歴史博物館 ■ 『研究紀要 第5号「近江大工・藤岡和泉の名乗りについて」』滋賀県安土城郭調査研究所 ■ 『藤岡和泉一企画展 ユネスコ無形文化遺産・長浜曳山祭を造った大工のすべて』長浜市長浜城歴史博物館/編 長浜市長浜城歴史博物館 		

登録番号	Q17	調査年月	2024年2月
質問	塩津街道・海道ルートについて		
回答	<p>『日本歴史地名大系25 滋賀県の地名』p.1043、『図説 近江の街道』p.129～には「塩津街道」と記載されていますが、『塩津浜かいわい』p31、『みーな びわ湖から vol.142』p.2では「塩津海道」と記載されています。なお、『中近世古道調査報告9 若狭街道・塩津海道』においては「塩津街道」「塩津海道」共に使われています。</p> <p>『日本歴史地名大系25 滋賀県の地名』p.1043によると、「琵琶湖北岸の塩津湊と越前国敦賀を結ぶ。海津と敦賀を結ぶ七里半越に対して五里半越とも称し、畿内と北陸を結ぶ最短路として重要な交通路であった」とあります。『図説 近江の街道』p.130に全体の道路地図があります。『塩津浜かいわい』p.49-p.58では全体を実際に歩いて検証されています。『みーな びわ湖からvol.142』p.18によると、「塩津海道は日本海側の敦賀から近江へ、海の幸などを運ぶ重要な道だった。中世までは深坂峠を越えて越前・近江の境の山地を抜けたが、急坂であったため、天正年間に越前の疋田から新道野(ツドリ)、沓掛(ツカ)を經由して塩津に至る道が開かれた。そのため塩津海道は迂回、新道野越ともいわれている」とあります。また、地図の一部が掲載されています。『中近世古道調査報告9 若狭街道・塩津海道』p.86-p.89にも地図が掲載されています。</p> <p>参考資料：市内図書館で所蔵しています</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 『日本歴史地名大系25 滋賀県の地名』平凡社 ■ 『図説近江の街道』江竜喜之ほか/執筆 郷土出版社 ■ 『塩津浜かいわい』塩津浜歴史研究会／編 ■ 『みーな びわ湖からvol.142』長浜みーな協会 ■ 『中近世古道調査報告9 若狭街道・塩津海道』滋賀県教育委員会 		

登録番号	Q18	調査年月	2021年9月
質問	長浜の引札について		
回答	<p>『長浜の引札』 p.2によると、引札とは江戸時代から明治・大正にかけて盛んに利用された広告用の刷り物のことで、現代の広告チラシにあたります。 p.6には、「引札の起こりは、商業活動が活発化した江戸時代中期といわれ、【報条（杓ヅヨリ）】【札まわし】【口上書】などとも呼ばれていました。最初は墨刷り一色でしたが、後に二色刷りとなり、文化・文政（1804～1829）の最盛期には錦絵風の多色刷りになり、明治へと引き継がれていきます。…明治から大正にかけては、図柄を中心とした【正月用引札】が全国的に流行します。正月用引札とは、その名の通り、新年を迎えるにあたり、各商店が得意先への挨拶まわりに配ったもので、錦絵（多色刷り浮世絵版画）の技法を取り入れた鮮やかな色づかいと斬新な図柄が特徴です」とあります。 p.10には長浜では、明治15年（1882）に開通した鉄道や琵琶湖の連絡船などによる交通網の発展に伴い商業活動も活発になり、数多くの商店が軒を連ねるようになったと記述があります。</p> <p>『長浜の企業人列伝』 p.14-p.15では「引札にみる長浜のにぎわい」という項目で鉄道に関連する引札が紹介されています。</p> <p>現存する引札の中には現在まで続いている老舗店の名前も見られます。『み～なびわ湖からVol.153』 p.10-p.11には「引札に見る長浜の老舗」として「小山仁平引札」「親玉店引札」などの引札が紹介されています。</p> <p>参考資料：市内図書館で所蔵しています</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 『長浜の引札』 長浜市長浜城歴史博物館 ■ 『長浜の企業人列伝』 長浜市長浜城歴史博物館/編 長浜市市民協働部歴史遺産課 ■ 『み～なびわ湖からVol.153』 長浜み～な協会 		

登録番号	Q19	調査年月	2021年7月
質問	大吉寺（旧浅井町野瀬）の歴史について		
回答	<p>『滋賀県百科事典』 p.457「大吉寺」の項目には大まかな歴史が簡潔に述べられています。</p> <p>大吉寺の沿革については、『寺院縁起の成立と在地の情勢 江州浅井郡大吉寺の放生会と「大吉寺縁起」』の「二、大吉寺沿革～放生会を中心に～」に詳しく記載があります。</p> <p>『東浅井郡志 第4巻』 p.566の「大吉寺縁起」によると、大吉寺の本尊観世音菩薩について、さらには建立起源などがわかります。p.567「大吉寺勸進帳」によると、大吉寺の名前の由来、延暦元年(782)の洪水で天吉寺の額の「天」の「一」が洗い流されたことがわかります。『日本歴史地名大系25 滋賀県の地名』 p.971「大吉寺跡」にも同じ内容の記載があります。</p> <p>『滋賀県史蹟調査報告書 第6冊』 p.65-113に「大吉寺」の本坊各堂階について詳しく述べられています。</p> <p>『寂寥山（シヤリョウザン）大吉寺』は、平成14年（2002）10～11月の浅井町歴史民俗資料館企画展の内容を再構成し、編集した資料であり、やさしくまとめられた歴史のほか、史跡・美術工芸品、古文書などがカラー写真で紹介されています。</p> <p>『史蹟大吉寺』には、室町幕府の祈願寺となった経緯のほか、南北朝から戦国時代の大吉寺の創建と盛衰が語られ、遺跡、自然については信徒の目で述べられています。大吉寺史蹟保存会により編集されたものであり、生活の一部としての大吉寺をとらえた資料です。</p> <p>参考資料：市内図書館で所蔵しています</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 『滋賀県百科事典』 滋賀県百科事典刊行会/編 大和書房 ■ 『寺院縁起の成立と在地の情勢 江州浅井郡大吉寺の放生会と「大吉寺縁起」』 橋本章/著 佛教大学鷹陵史学会 ■ 『東浅井郡志 巻4巻』 日本資料刊行会 ■ 『日本歴史地名大系25 滋賀県の地名』 平凡社 ■ 『滋賀県史蹟調査報告 第6冊』 滋賀県/編 名著出版 ■ 『寂寥山大吉寺』 浅井町歴史民俗資料館 ■ 『史蹟大吉寺』 伏木貞三/編 大吉寺史蹟保存会 		

登録番号	Q20	調査年月	2017年3月
質問	国友鉄砲と曳山の関わりについて		
回答	<p>『国友鉄砲の歴史』 p.148の「国友に開いた文化の華」によると、「国友の鉄砲鍛冶たちが、財政難のため、鉄砲製作以外にも収入の道を求めなければならなくなったことが、国友に文化の華を開かせることになった。…江戸時代後期、物資の集散地として栄えた長浜は、富裕な商人たちが軒を連ねていた。そして、彼ら、長浜の町衆たちの祭りに繰り出される曳山は、各町が豪華さを競った。国友の鉄砲鍛冶たちは、その金工技術を買われ、曳山の銚（かざり）金具の製作に腕を奮った」とあります。</p> <p>『み～な びわ湖からVol.139』 p.26-p.27には、「飾金具には緞金（ダング）や彫金、着色といった技術がふんだんに使われており、なかでも金属に色を付けることに関しては、鍍金（トキ）や七宝の技法が多くみられる。特に寿山、常盤山、翁山の七宝金具は出色といわれている」、「飾金具の作品の中で特筆すべきことが、その職人の中に国友鉄砲の金工職人である国友源太夫・藍水堂一徳の名前があるという点だ。その作品は寿山に残る」とあり、国友鉄砲と曳山の関わりについて記載されています。</p> <p>寿山の金具の写真と詳細は『特別展 国友鉄砲鍛冶』 p.67-p.68で見ることができます。</p>		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■ 『国友鉄砲の歴史』 湯次行孝／著 サンライズ出版		
	■ 『み～な びわ湖からVol.139』 長浜み～な協会		
	■ 『特別展 国友鉄砲鍛冶』 市立長浜城歴史博物館／編		

登録番号	Q21	調査年月	2021年10月
質問	昭和56年（1981）の余呉地方の豪雪について		
回答	<p>『余呉町誌 通史編上巻』 p.31-余呉町の気象災害として昭和56年の豪雪があげられており、 p.36には昭和55年12月29日から昭和56年1月23日までのあいだに柳ヶ瀬の積雪は350センチになり、死者1名、負傷者12名、住家全壊7戸、半壊10戸、一部損壊357戸などと報告されています。</p> <p>『余呉町誌 通史編下巻』 p.558～には昭和56年の豪雪として、1月23日中河内で積雪655センチとあります。</p> <p>『滋賀県災害誌 第3部』 p.72-には気象概要、県内の観測所における積雪量、警報・注意報処置、県内の被害状況、り災者、被害金額等が記されています。</p> <p>『白魔との闘い 56豪雪の記録』の序文、「はじめに」によると、昭和56年の豪雪は未曾有の豪雪で、100日におよぶ白魔との闘いであり、自然との闘いに耐え抜いた住民の苦労、雪解け後表面に出て来た被害、その他観測史上異例の豪雪の貴重な資料と記録を残すこととしたと記載されています。</p>		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■ 『余呉町誌 通史編 上下巻』 余呉町誌編さん委員会/編 余呉町役場		
	■ 『滋賀県災害誌 第3部』 滋賀県		
	■ 『白魔との闘い 56豪雪の記録』 余呉町/編 建設省高時川ダム調査事務所		

登録番号	Q22	調査年月	2021年4月
質問	長浜市の劇場について		
	<p>『近江長浜町志 第3巻本編下』 p.407に明治16年6月25日横町に長栄座が創設されたとあり、大正9年には南呉服町に日比劇場が建設中と記載があります。</p> <p>『長浜市史 第7巻』 p.126には、「演劇も明治期にはさかんとなり、明治16年（1883）6月には常設の劇場である長栄座（のち松竹館、さらに長浜協映と改称）が横町（元浜町）に開設され、ついで泉座（北呉服町）が開設され、大正10年（1921）4月には常設映画館の日比劇場（のち大和劇場、南呉服町）、同年8月には寄席の新清館（高田町）がいずれも興行をはじめた。その後も紺屋町（朝日町）に帝国館（のち長浜大映・長浜映劇）、西本町（元浜町）にロード劇場（長浜東映）などができた」と記載されています。</p> <p>『長浜市史 第4巻』 p.123によると、上記の長栄座では歌舞伎、玉乗り、落語、角力などの興行があり、泉座では素人浄瑠璃大温習会が開催されたそうです。</p> <p>『私たちの調べた郷土長濱』 p.130-p.132には刊行時（昭和25年）の松竹館、文化会館、昭和劇場、長浜映画劇場、大和劇場について記述があります。</p> <p>『湖北の今昔』 p.14には昭和20年代の松竹館の写真が掲載されています。また『目で見る湖北の100年』 p.89に「映画館前」（館名不明）として昭和初期の写真が掲載されています。</p>		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■ 『近江長浜町志 第3巻本編下』 泰山堂		
	■ 『長浜市史 第4巻』 長浜市編さん委員会/編		
	■ 『長浜市史 第7巻』 長浜市編さん委員会/編		
	■ 『私たちの調べた郷土長濱』 長濱市立第四中学校教育調査部/編		
	■ 『湖北の今昔』 郷土出版社		
	■ 『目で見る湖北の100年』 郷土出版社		